

ルカによる福音書 10 章 25-37 節 「隣人を神の愛で愛す」

1A 一つの戒め 25-27

2A 隣人への愛 28-37

1B 自分への欺き 28-29

2B 宗教による欺き 30-32

3B 憎んでいる人への愛 33

4B 具体的な行い 34-35

5B 聖霊の働き 36-37

本文

セッション3に入ります。私たちは第三部、「私たちを通して神の愛を伝える」ということです。本書の最初の言葉を先に読んでみましょう。

クリスチャンの福音の中心は愛です。神があなたを愛され、あなたがこよなく神を愛し、自分を愛するようにあなたはあなたの隣人を愛します。それがクリスチャンのメッセージの中心であり本質です。

私たちの天の父は私たちに、ご自分のことを深く愛し、また互いに愛し合うように、そして、それによって本当のキリスト教がいったいどのようなものなのか、私たちがはっきりと表すように呼びかけられています。今ほど、この世がそのような実証を必要としているときはありません。今日キリスト教は、まるで愛が欠けている、単なるむなしい宗教の一つとしてでしか通用しないことがあまりに多いのです。神は、ご自分が愛しておられるように、私たちにも愛することを呼びかけておられます。そして、それは自分たちの内から魔法のように出すことができるものではありません。私たちの心に、神の愛を植え付けてくださるように、私たちが神にお願いすることによってのみ、そうなるのです。そうやって初めて、神が愛されているように私たちも愛するようになるのです。

神が愛であるということ、そして、その愛を受けて神を心を尽くして愛すということ、それをしている時に、神の愛が私たちから流れ出ます。ルカによる福音書 10 章 25 節から 37 節の、「良きサマリア人」の話から学んでいきたいと思えます。

1A 一つの戒め 25-27

25 さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」26 イエスは彼に言われた。「律法には何と書い

てありますか。あなたはどう読んでいますか。」27 すると彼は答えた。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」

興味深い議論が始まります。律法の専門家がイエス様に尋ねていますが、ユダヤ教の中では、このように議論するのが好きです。一人が質問すると、質問された人は質問で返答します。それで話が延々と続きます。ここでは、「永遠のいのちを受け継ぐには、律法の何をしたらよいか？」ということです。これは、必ずしも行いによる救いの話をしていません。私たちは、とかく神の命を静止しているもののように考えてしまいます。神の永遠のいのちがあるならば、律法を行っているような生活をしているはずだ、ということです。律法を守る中に、いのちが表れていると言ったらいいでしょう。だから、言葉だけで行いが無いのは自分を欺いているだけだということです。

イエス様は逆に尋ねられました、すると彼はとても教科書的な回答、正しい回答をしました。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」これをひとまとめに言っているところがすごいです。イエス様は、十字架に付けられる最後の週において、律法の専門家から同じように質問を受けました。「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」が質問です。そして、初めの申命記 6 章 5 節からの言葉を引用されました。これはユダヤ教徒であれば、毎日、唱える、彼らの信仰の支柱となっている言葉です。それに対しては、「全くその通りだ」と聞いている人々は思ったことでしょう、ところがイエス様はもう一つ加えました。それがレビ記 19 章 18 節、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」であります。律法の専門家は、一番重要なのはどの律法か？と尋ねたのに、二つの戒めを与えられ、それで、「この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」と言われました(マタイ 22:40)。つまり、この二つには優劣はない、どちらも同様に重要だということです。何か競争で、二人の選手が全く同じ点数で、優勝が二人出てしまったみたいな世界です。

つまり、神を愛している、知っているということは、隣人を自分自身のように愛しているというところに現れていると言えます。また言い換えれば、隣人を愛することは、神によってのみ愛することができるということです。どちらがなくなっても、成り立たない戒めなのです。そのことを、律法の専門家は、ここで見事でイエス様に二つを一組で答えました。

2A 隣人への愛 28-37

1B 自分への欺き 28-29

28 イエスは言われた。「あなたの答えは正しい。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」29 しかし彼は、自分が正しいことを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とはだれですか。」

イエス様はその通りだと答えられたけれども、彼は自分が正しいことを示そうと示しています。自分がその戒めを守られているということ、イエス様の前で証明したかったのでしょう。ここに、だれにも潜む、過ちがあります。自分で隣人を愛さないといけないということです。自分の中から、その力を振り出して隣人を愛さないといけないと思っています。それが、自分が正しいことを示そうとしまっている過ちであります。自分の内に、隣人を愛せる愛など、これっぽちもないということ、を悟る時に、その時に神の愛を自らが受け、その愛によって応答して、御霊の力によって初めて、隣人を愛することができます。

けれども、この律法の専門家は良い点を付いていて、抽象的に隣人を愛さないといけないということではなく、具体的に隣人は誰になるのか？という質問であり、これは良いことです。私たちはとかく、愛について抽象的に語ります。けれども、これから見て行きますが、愛というのは非常に具体的で、人の行いの中に現れるものです。

2B 宗教による欺き 30-32

30 イエスは答えられた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下って行ったが、強盗に襲われた。強盗たちはその人の着ている物をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 たまたま祭司が一人、その道を下って来たが、彼を見ると反対側を通り過ぎて行った。32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。

エルサレムとエリコの道は、高度で 1 キロメートルぐらいの差のある坂道であります。エルサレムからエリコに下る時、海拔マイナスになるぐらい低いところに行くことになります。ここは、危険な道でいつも盗賊が出て来ると言われていました。それでイエス様は、強盗に襲われる話をされています。彼からはぎとるために、殴りつけ、半殺しにして立ち去りました。そこに祭司が通りかかりました。またレビ人も通りかかりました。けれども、彼らは通り過ぎてしまいました。何か目に浮かびそうです！律法を守り行なっているユダヤ教の超正統派の人たち、本当に歩くのが早く、しかも周りが見えていません。こういったことをやっていくのだらうと思います。

けれども、ここでの本質は、「宗教的な振る舞いで、ごまかしてしまう」という過ちです。私たちは、霊的であるかどうかの判断を、その人がどのように語っているのか、意見がしっかりしているか、祈りにおいての言葉は？とか、目で見える基準を持っています。けれども、具体的に目の前にある必要に対して、どこまで応えているか？において、その人の霊的な状態が表れます。「もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。(1ヨハネ 1:6)」

3B 憎んでいる人への愛 33

33 ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思っ

た。

イエス様は、ここで彼の自己義認を打ち砕かれています。「サマリア人」です。サマリア人は、ユダヤ人と深い確執のあった人々です。北イスラエルが紀元前 722 年にアッシリアによって滅ぼされ、アッシリアは多くのイスラエル人を捕らえ移しました。その代わりに、他の地域の人々をここに連れて来ています。イスラエル人と異邦人の結婚によって、生まれてきた子孫がサマリア人です。ですから、サマリア人はユダヤ人と異邦人の混血です。次に、異邦人の偶像礼拝を取り入れたので、ユダヤ教との混合宗教が始まっています(2列王記 17:24-33)。それで、人種だけでなく、宗教的にもますますユダヤ人は嫌いました。そして、バビロンから帰還したユダヤ人は、エルサレムの再建をしている時、サマリア人から手伝おうと申し出を受けましたが、断りました。そのためサマリア人は再建工事を阻止しようとしています(エズラ 4:1-4、ネヘミヤ 4:1-3)。

けれども、サマリア人はサマリア人で、イスラエル北部地域は、昔、イスラエルの先祖たちが信仰の歩みをした由緒ある町々があります。ヤコブの井戸もありましたね、スカルに。神への礼拝は、ダビデとソロモンの時にエルサレムに中心が移りましたが、私たちが元祖であるという自負心がサマリア人には強かったのです。ここまで入り組んでいる歴史を持っているので、ユダヤ人とサマリア人は付き合わず、ユダヤ人もガリラヤとユダヤの間を、直線のサマリアではなく、ヨルダン川沿いを迂回していたほどでした。

そのサマリア人が、半殺しにされているユダヤ人を可哀想に思っていると言うのです。祭司やレビ人という、霊的に見える人々が手伝わず、自分たちが憎んでいるサマリア人が助けているのです。ここから私たちは何を言うことができるでしょうか？愛というのは、気の合う人々との間を超えたところに、その真価が試されるということです。自分が難しい人だと感じる人々に対して。また、自分に敵対する人々に対してでさえ、「敵を愛しなさい」とイエス様は命じられました。この時点で、自分を正しくしようとして「私の隣人は誰ですか」と尋ねて律法の専門家の、そのプライドを打ち砕かれようとしているのです。

4B 具体的な行い 34-35

34 そして近寄って、傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで包帯をし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行って介抱した。35 次の日、彼はデナリ二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』

サマリア人がしていることを、見てください。非常に具体的ですね、傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぎました。当時の消毒や治癒の方法です。そして、家畜に乗せています。さらに宿屋にいて介抱しています。それだけでなく、彼の宿代を支払っています。ここまで親切にしています。体を動かしているのです。言葉ではないのです。使徒ヨハネはこう言います、「Iヨハ 3:17-18 この世の財

を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているのでしょうか。子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」

5B 聖霊の働き 36-37

36 この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」37 彼は言った。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

隣人を愛しなさいという命令ですが、サマリア人のしたことは、実は彼自身が隣人になったということ。近くにいるようにして、寄り添ったということです。そして、愛というのが、このような憐れみの行いであり、仕えることであることが分かりました。愛というと、私たちは何か感情であったり、分かったような、分からなかったようなものであるかのように考えますが、とても地に足のついたようなことなのです。要は、その人が仕えているのかどうか？なのです。

最後にイエス様が、「あなたも行って、同じようにしなさい。」と言われます。こんなことは、決して聖霊の力がなければできません。ですから大事なことは、自分にはこんな愛がないということを知り、主に拠りすがり、憐れみを請い、そして主が聖霊によって自分を通して愛を示してくださるようお願い求めることです。御霊の働きによって、私たちが愛の行いを示すことができます。実を結ばせることができます。